北海道は宝の山 歴史のロマンや先人たちの苦労を知る良い機会に

池田　昨年秋に北海道遺産第2回選定が終了し、徐々に道民にも理解が深まってきたように見受けられますが、この場であらためて「北海道遺産とは何か」を北海道遺産構想推進協議会の辻井会長にお話しいただきたいと思います。

北海道遺産構想推進協議会会長 辻井達一氏

辻井　今まで見過ごされてきたものや、その地域では当たり前のように思われてきたことでも、ほかの人や地域から見れば新鮮に感じるものがあります。北海道遺産はそれらを再発見しようと始めた運動です。ただ単に文化財を探そうというのではなく、地域に役立ち、活用できるものを発見していこうという、少し欲張りな思いもあったんです。

池田　確かに、ジンギスカンやラーメンといった食が遺産になるなど、選定基準がユニークですよね？

辻井　はい。いくつか考えられた基準の中にはまず、「学術的価値・美的価値」が挙げられます。そして私たちは「アプローチ価値」というものを加えました。これはどんなに遺産に値するものでも「立入禁止」では身近さを感じられず、今後の活用価値に結び付かないと考えたからです。また「思い入れ価値」も重視しました。これは地域の人々が遺産を大切にし、うまく活用する熱意や行動力があるかどうかを見るものです。どんなに立派でも、人々の思いがないと遺産は輝きませんから。

池田　なるほど。北海道遺産の目的や特色が明らかになったところで、高橋知事の北海道遺産についてのお考えをお聞きかせください。

高橋　まず北海道が「宝の山」であると再認識できたと思います。選定には第1回、第2回合計で約2万5千通もの応募があり、多くの人々がかかわったことにも意義があると思います。また、北海道のアイデンティティーを知る良い機会になったのではないでしょうか。遺産に選定されたものには、北海道の大切な歴史や先人たちのご苦労といった物語が含まれています。例えば、第2回選定の「北海幹線用水路」は一見、どんなところが遺産なの？　と疑問に思う方もいるかもしれません。しかし、農業専用としては日本一長いこの用水路は北海道を食糧大国にしてくれた、大変な功労者といえます。また農耕や運搬といった開拓の労働者として開拓民と苦労を共にした「北海道の馬文化」には独自の歴史的背景を感じますし、「摩周湖」「雨竜沼湿原」といった自然は、地元の方たちの地道な保全活動によって美しさが保たれているなど、北海道の歴史や先人たちのロマン、人々のご苦労といった物語に思いをはせる良い機会になったと思います。

北海道知事 高橋はるみ氏

北海道遺産は地域の努力と知恵や工夫でもっと輝く

池田　第2回選定で「江別のれんが」が選定されました。森さんは現在のやきもの21の母体となる「えべつやきもの市」実行委員会の立ち上げから活動されていましたが、活動の経緯を教えてください。

森　「えべつやきもの市」は1990（平成2）年から始めてもう15年になりますが、最初は小規模なもので何年続けられるかなと思っていたくらいです。立ち上げの際、まず自分たちが住むまちの魅力は何だろうと探しました。そこで「やきもの」に目を向ける訳ですが、継続には経済の活性化と自立可能な活動の組織体を創ろうと考え、やきもの21は、現在NPO法人となっています。

池田　継続されていく途中で北海道遺産に選定されたのですが、活動に変化などはありますか？

森　選定をされてからまだ日が浅く、大きな変化はありませんが、認定証の受与式で出会った人々の話を聞いて納得したことがあります。それは遺産は単に「褒美」ではなく、それを取り巻く地域の人間がこれから遺産をどう活用していくか、私たちの「知恵と工夫」次第でどんなふうにも発展させることができるんだと認識させてもらったんです。そうした意識改革のきっかけを頂戴したという意味で、選定されたことで気持ちも新たになりました。

NPO法人 やきもの21理事長 森陵一氏

遺産のまちに元気と活力が生まれ始めている

池田　森さんの場合は選定される前から「わがまちの遺産」を探し活動していたのですが、選定後に新たな取り組みに挑むNPOや民間団体も多いと聞きます。具体的な例を教えていただけますか。

辻井　ありがたいことに、たくさんの例があります。一つは第1回選定の「空知の炭鉱関連施設と生活文化」ですが、閉山後も地元に残る元炭鉱マンが施設内のボランティアガイドを務めているんです。03（平成15）年には赤平市が「国際鉱山ヒストリー会議」を誘致し、各国から参加した研究者たちが炭鉱施設の保存状態と住民の熱意を絶賛したと聞いています。

高橋　最近では石炭を知らないという子どもたちが増える中、日本の近代化を支えた石炭産業が、